

平城宮第一次大極殿院広場の調査

—第520次

1 はじめに

奈文研では、第2次調査（1959年）以来、第一次大極殿院の区画東半および回廊部分を中心に、継続的に調査をおこなってきた。既往調査により、主にⅠ期（奈良時代前半）、Ⅱ期（奈良時代後半）、Ⅲ期（平安時代初頭）の3時期の遺構変遷があきらかとなっている（『平城報告 XVII』）。

今回の調査は、第72次調査（1971年）で検出した、棧敷風の遺構と解釈されているSB7141（Ⅲ期）、Ⅰ期の第一次大極殿院の南北通路の東側溝と目される南北溝SD7142の中軸線を挟んだ対称位置における西側溝の確認を主な目的とし、区画の中軸および上記の遺構の西対称位置を含む範囲に調査区を設定した（図187）。調査区は第72次調査と第217次調査（1990年）の両調査区に挟まれる。調査面積は東西34m、南北14mの476㎡である。調査は2014年1月7日に開始し、3月18日に終了した。なお、概要は『紀要 2014』で報告している。

2 地形と基本層序

第一次大極殿院地区は、奈良山丘陵の尾根筋に位置し、北から南へなだらかに傾斜する。今回の調査区は、磚積擁壁SX6600の南方約20mの中軸線付近に位置し、2010年の大極殿復原にともなう整備によって、現況の調査前の地形も緩やかに南に傾斜していた。

基本層序は、地表から整備にともなう盛土、旧地表面、耕作土、床土、包含層、Ⅱ期礫敷層、Ⅱ期の整備にともなう整地土、Ⅰ期礫敷層、地山の順である。部分的にⅠ期造成前の地形を均すための整地土が地山上にみられる。遺構検出は包含層を取り除いたⅡ期礫敷層でおこない、一部これを掘り下げ、Ⅰ期礫敷層および整地面で検出した。なお、第一次大極殿院の中軸付近では、大正期の石積み護岸の溝（以下、大正水路とする）によって深く掘削されているため、この範囲では、地山面あるいはⅠ期造成前の整地面で検出をおこなった。

3 検出遺構

今回の調査では、主にⅡ・Ⅲ期の遺構を中心に検出し、

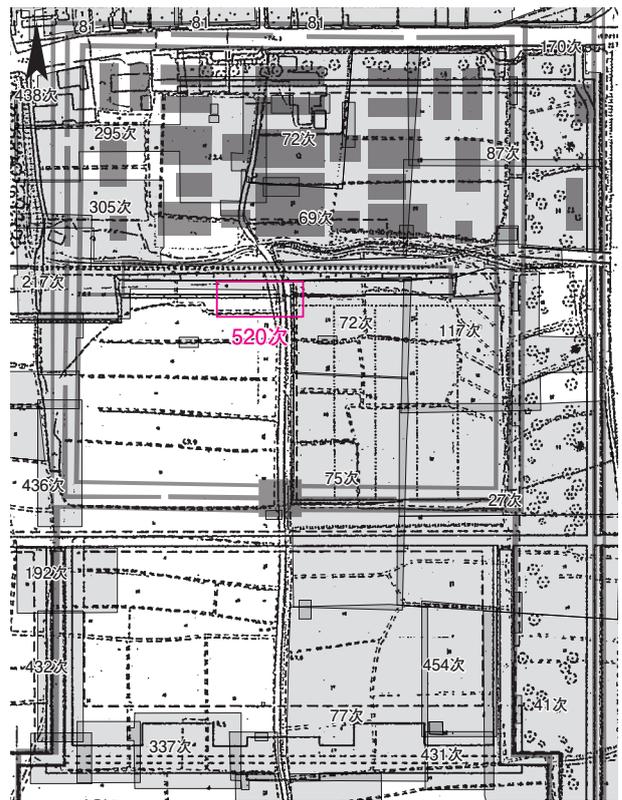


図187 第520次調査区位置図 1 : 3000

一部、Ⅰ期およびそれ以前の遺構を確認している。以下、古い時期の遺構から順に記す。

Ⅰ期以前の遺構

南北溝SD19749 調査区の西北部の排水溝および調査区南端のサブトレンチの断面で確認した素掘りの南北溝。地山面あるいはⅠ期の造成以前の整地土の上面から掘り込んでおり、Ⅰ期の礫敷広場SH6603Aに覆われる。第一次大極殿院の造営にともなう遺構の可能性はある。

Ⅰ期の遺構

礫敷広場SH6603A 磚積擁壁から第一次大極殿院の南面築地回廊まで広がる礫敷広場。今回の調査区では、主に排水溝や断割調査の断面で確認し、第一次大極殿院の中軸付近で、部分的にⅡ期の礫敷をはずして検出した（図190）。調査区の大半で、元の地形の上に直接、径約3～5cmの礫を敷いており、一部、元の地形の窪み部分では整地が確認できる。礫敷は良好に遺存するところで、約10cmの厚さが確認できるが、失われている部分も多い。調査区全体で、南に向かって緩やかに傾斜し、南に向けて排水したと考えられる。

南北通路SF19751・南北通路西側溝SD19750 SD19750は調査区西北部の排水溝の断面および東西溝SD7132の底面で確認した素掘りの南北溝（図191・192）。幅約1.5m、深さ約15cm。第一次大極殿院の区画中軸を挟んだ対称の

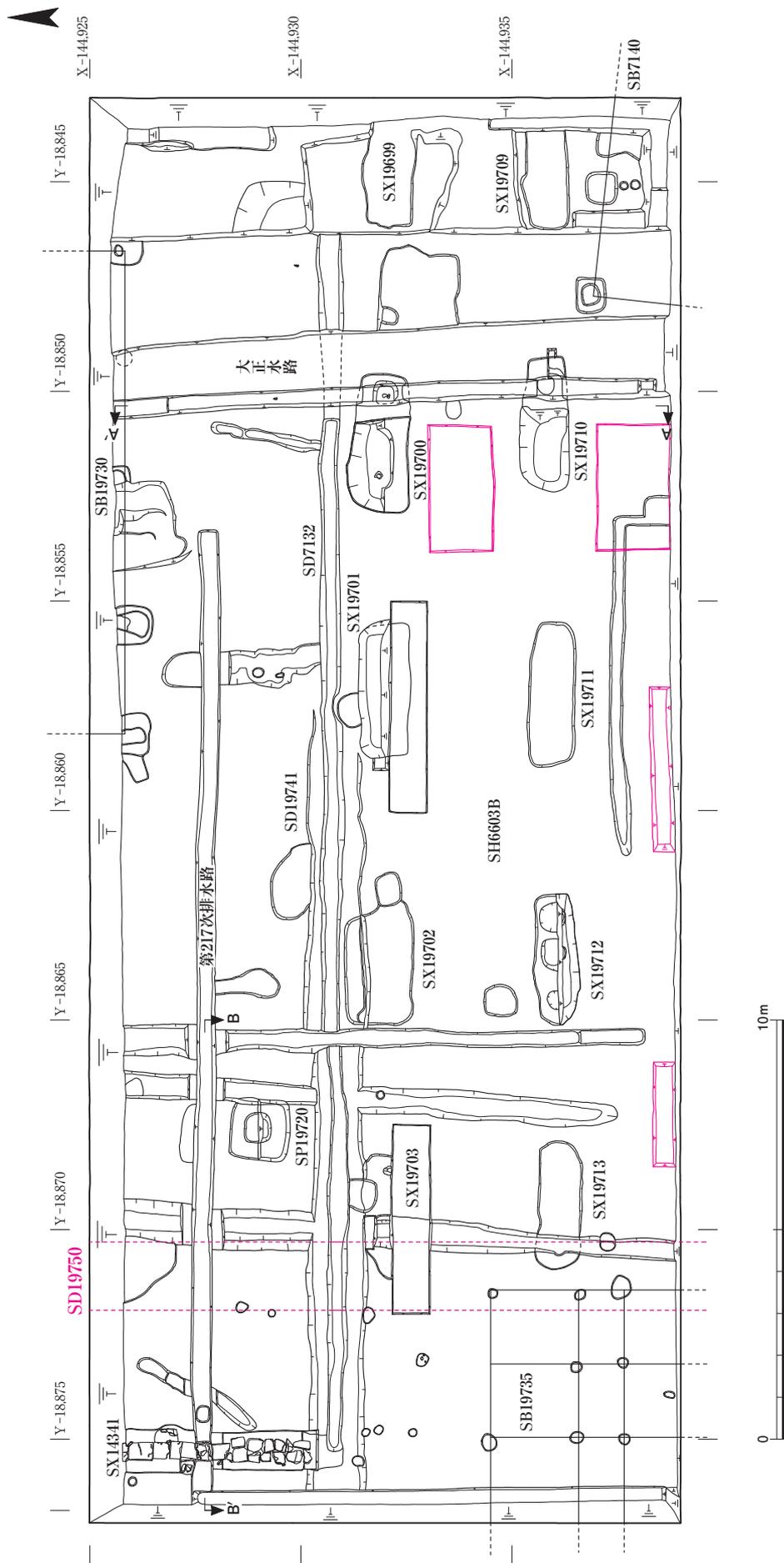


图188 第520次調査区遺構図 1 : 150

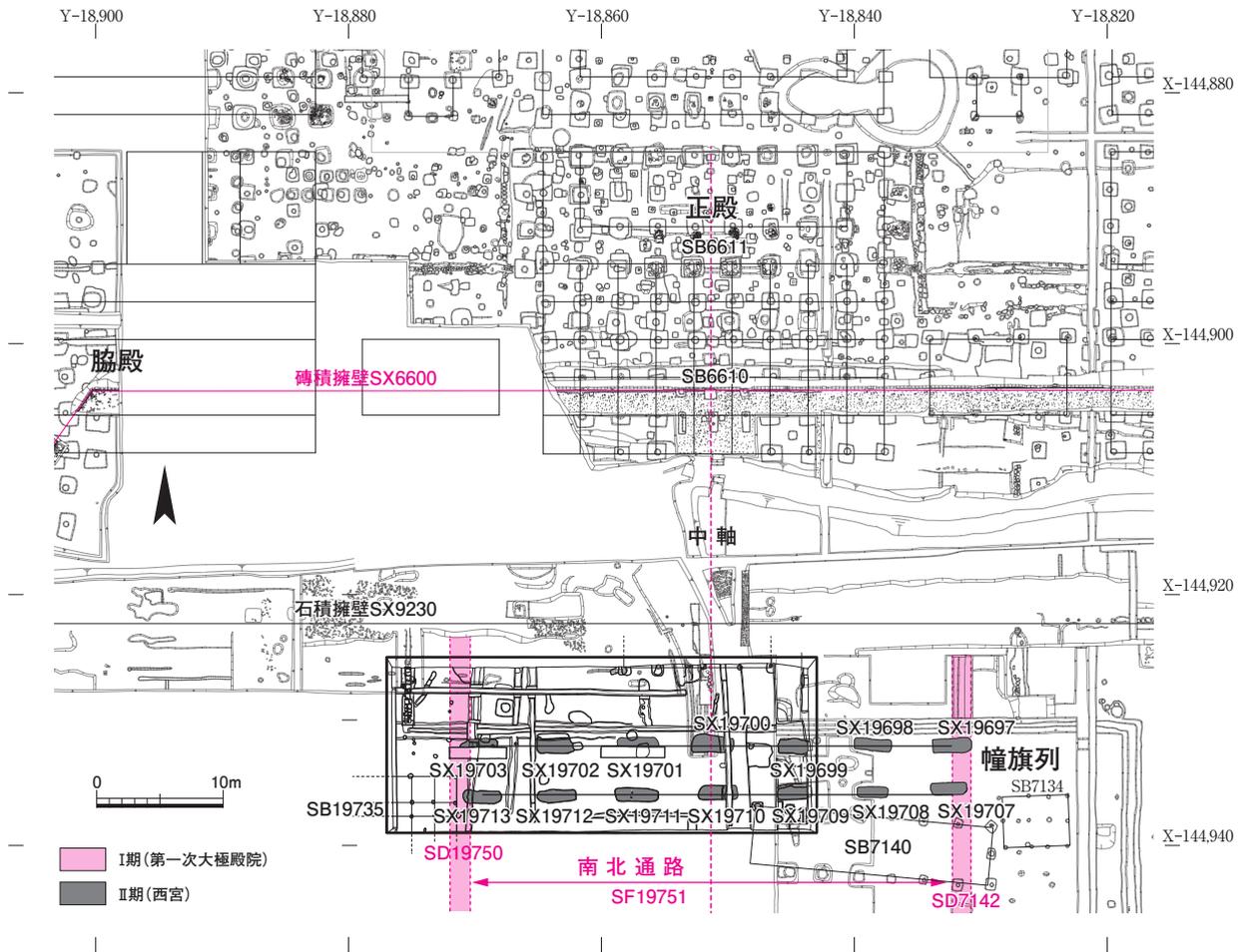


図189 第520次調査区と周辺の遺構図 1 : 600



図190 I期磔敷広場SH6603Aの平面検出(西から)

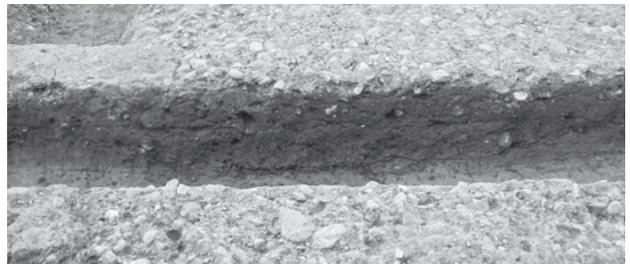


図191 西側溝SD19750(北から)

位置で、同様の南北溝SD7142を検出しており(第72次調査)、これを第一次大極殿院南門から大極殿へ至る幅約38mの南北通路の東側溝と想定していた。今回、検出したSD19750は西側溝にあたり、両側溝を検出したことで、南北通路SF19751の存在が確認された。南北通路の幅は約38.5m(130尺)。SD19750は磔敷広場SH6603Aの磔敷の上面から掘り込んでおり、通路部分とそれ以外の部分で舗装の違いは確認できない。またII期の整地土が溝埋土の直上にあることから、I期の間は存続していたと考えられる。なおSD19750は磚積擁壁の斜路南端部よりも北方で確認しており、この点は大極殿院の中軸および磚積擁壁の上下の動線を示す重要な知見である。

II期の遺構

磔敷広場SH6603B 石積擁壁SX9230から西宮の南面築地回廊SC3810まで広がる磔敷で、調査区全体で良好

に遺存する(図194)。調査区の大部分で、I期の磔敷上に、厚さ約5cmの整地を施し、その上にさらに径5cm程度の磔を約5~15cmの厚さで敷く。調査区西部の一部では、I期の磔敷上に、II期の磔敷が直接敷かれる。南に向かって緩やかに傾斜しており、南に向けて排水したと考えられる。なお、III期の磔敷は確認できず、II期のものを踏襲したと推察される。

幢旗柱穴SX19697~19703・19707~19713 調査区のほぼ中央で検出した、東西5基、南北2列に並ぶ柱穴列(図194)。第72次調査とあわせて、各列7基ずつであることが確定した。柱間寸法はともに約5.9m(20尺)等間で、南北の柱穴列の間隔は、約3.8m(13尺)。7基の中央にあたる柱穴SX19700・19710は、ほぼ区画の中軸線上に位置する(図189)。

柱掘方は東西に細長い楕円形で、大きさは北側の柱穴

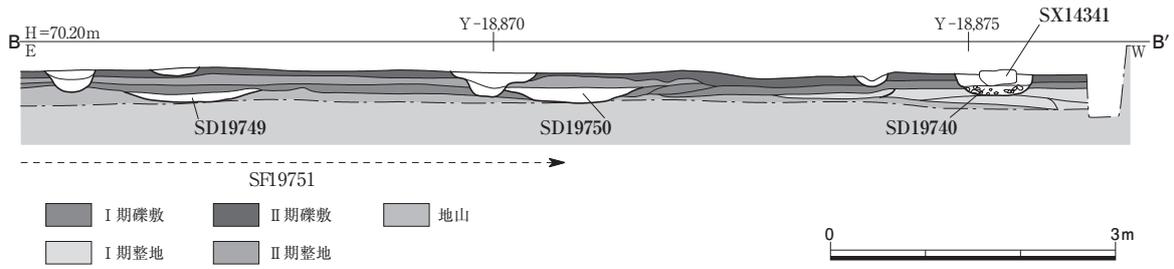


图192 第217次排水溝南壁土層図 1 : 80

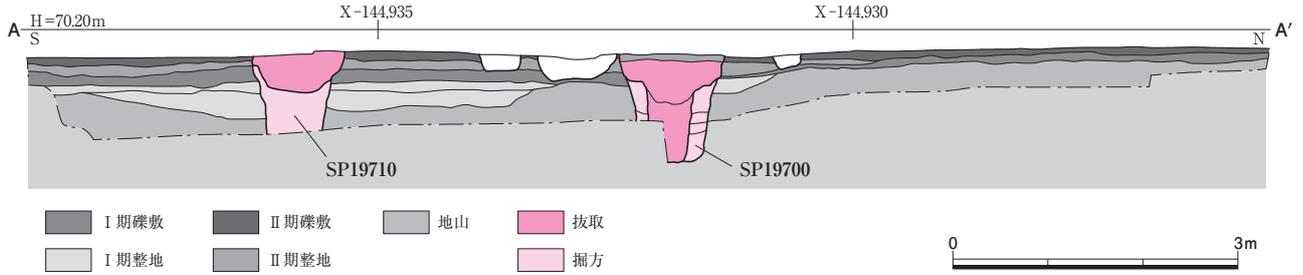


图193 大正水路西壁土層図 1 : 80



图194 幟旗柱穴列とII期礫敷広場SH6603B (東から)



图195 幟旗柱穴SX19700断割 (東から)



图196 幟旗柱穴SX19710断割 (西から)



图197 幟旗柱穴SX19700断割 (北から)



图198 幟旗柱穴SX19700断割 (北東から)

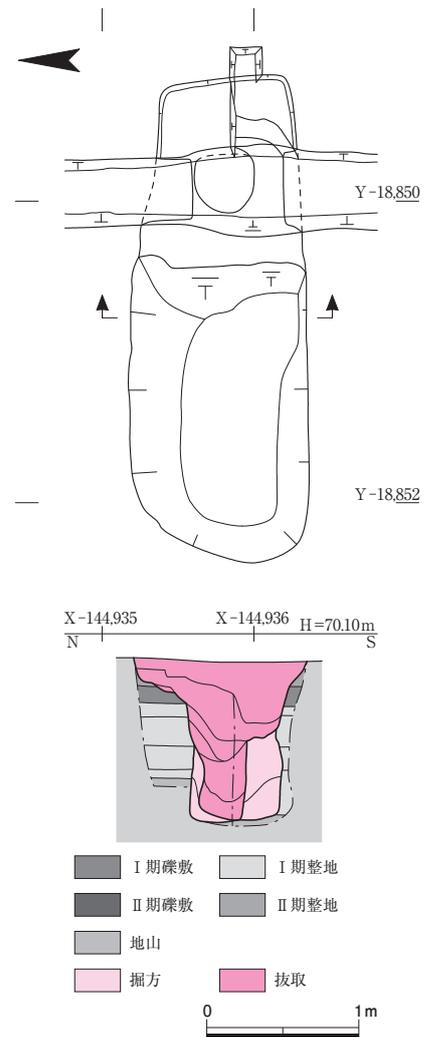


图199 幟旗柱穴SX19700断面図 1 : 50

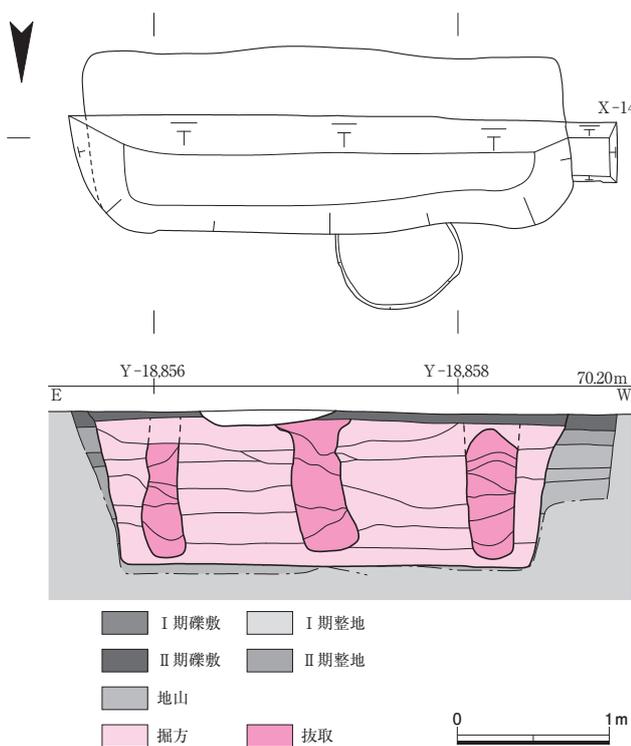


図200 幢旗遺構SX19701断面図 1:50

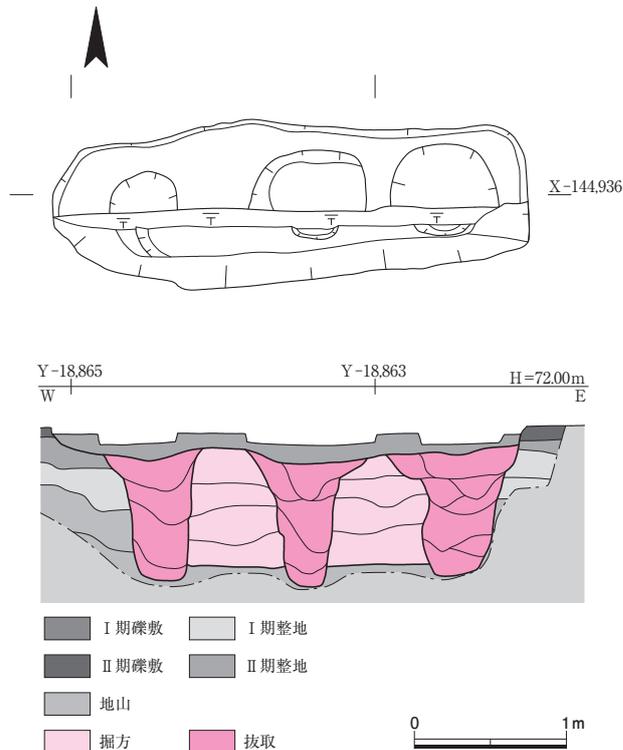


図202 幢旗遺構SX19712断面図 1:50



図201 幢旗遺構SX19701断割 (北東から)



図203 幢旗遺構SX19712断割写真 (南から)

列で東西約3.0m、南北約1.2m、南側の柱穴列で東西約3.0m、南北約1.0mを測る。断割調査から、掘方の深さは約1.0mで、各柱穴の柱掘方の底面がほぼ揃う(図199・200・202)。各柱掘方は3つの抜取穴を有し、それぞれの抜取穴の間隔は約1.0m、柱抜取穴から想定される柱径は約25~30cmである。掘方部分・抜取部分ともに、礫敷の上面から約5cmの深さまで埋め戻し、これより上は礫で埋めており、再舗装と考えられる。なおSX19697~19703・19707~19713のいずれの柱穴においても、複数回の掘方・抜取穴は確認できない。

南北の柱穴で掘方の埋土に違いがみられ、北側の柱穴SX19700・19701では、掘方の埋土が砂質であるのに対し、抜取穴の埋土には、径約5cmの礫が多く詰まる。一方、南側の柱穴SX19710・19712の抜取穴には、柱穴SX19700・19701と同様に径約5cmの礫が多く詰まるが、掘方は粘性の高い埋土である。

また掘方と柱位置の関係にも特徴の違いがみられる。南側のSX19710では、掘方の北壁や東西の壁に接する位置に柱を立てるが、北側のSX19700では掘方の壁から離して柱を立てている(図195・196)。

また柱穴SX19700では掘方内の西脇柱部分に段が確認でき、これは構築物の設置のために設けられた作業場の可能性がある(図197・198)。

これまで、南北2列の柱穴SX19697~19703・19707~19713を一連の遺構と考え、棧敷状の遺構SB7141と解釈してきたが、上記のように、南北の柱穴列は特徴を異にする点も多く、一連の遺構ではなく、後述するように、これらは、元日朝賀において立てられた3本の宝幢と四神旗、計7本の幢と旗(幡)(以下、幢旗)の遺構の可能性が極めて高い。

なお幢旗柱穴SX19697~19703・19707~19713は同じII期の礫敷面から掘り込んでおり、両者の先後関係は不

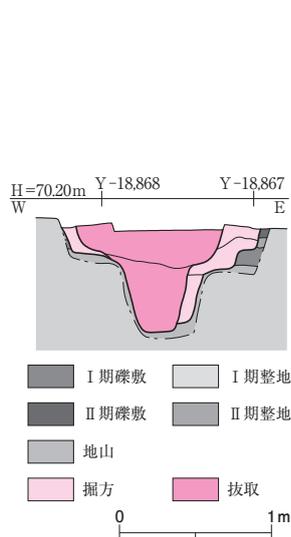


図204 柱穴SP19720断面図 1:50

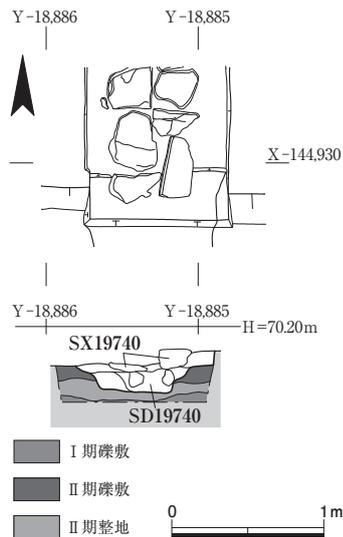


図205 石敷列SX14341・南北溝SD19740断面図 1:50



図206 石敷列SX14341と南北溝SD19740 (南から)

明で、年代指標となりうる遺物も出土していない。

柱穴SP19720 調査区の西北部で検出した掘立柱の柱穴。柱掘方は一辺約1.5mの隅丸方形で、深さは約30cm。柱の部分のみ約80cmの深さとする(図204)。現状、これと組み合わせる柱穴を検出しておらず、区画中軸線を挟んだ対称位置においても、同様の遺構は確認できない。幢旗など単独の柱による構築物の可能性も推察されるが、その詳細は不明である。

Ⅲ期の遺構

石敷列SX14341 調査区の西北部で検出した凝灰岩の切石の石敷列で、今回の調査区で約4m分を検出し、第217次調査とあわせ、総長5.4mとなった(図205・206)。凝灰岩の幅は約50cmで、二上山産と春日山地獄谷産と推定される。一部の凝灰岩には、石敷列には不必要な欠き込みがあり、基壇の羽目石などを転用した可能性がある。

区画の中軸を挟んだ対象の位置で、安山岩の石敷列SD7133を検出しており、『平城報告 X I』・『平城報告 X VII』では、これを東側溝、SX14341を西側溝、両溝間を内庭中央通路SF14342と解釈し、遺存する凝灰岩や安山岩は石組溝の底石で、側石は失われているとしてきた。しかし、Ⅱ期の礫敷広場SH6603BよりもSX14341の凝灰岩上面の標高がやや高いこと、Ⅱ期の礫敷上にⅢ期の礫敷の舗装が確認できないこと、据付掘方に凝灰岩粉がほとんどみられないことから、側石をとまなう石組溝の底石の可能性は考え難い。

また後述の南北溝SD19740と関連し、溝の蓋石の可能性も想起しうるが、SX14341の据付掘方がSD19740を壊しており、南端から約2m部分は幅約20cmの凝灰岩が2列に並び、かつ下層の溝のほうが凝灰岩より幅が広いことから、蓋石の機能を果たし難く、この可能性も考えにくい(図205・206)。このほか、区画や中央通路を示すため

の設備などの可能性もあるが、いずれも決め手に欠く。

南北溝SD19740 調査区の北西部、石敷列SX14341の下層に幅約40cm、深さ約15cmの素掘りの南北溝を確認した(図205・206)。調査区の北方へ延びると推定される。径3~5cmの礫が詰まる状況が確認できるが、Ⅱ期の礫敷との区別は明瞭ではないため、人為的に礫を詰めた礫詰暗渠であるのか、素掘りの開渠に礫が入り込んだのかについては判然としない。

東西溝SD7132・19741 調査区のほぼ中央で、第72次調査で検出した素掘りの東西溝の延長を約33mにわたって検出した。幅約40cm、深さ約15cm。南北溝SD19740と接続する可能性がある。SD19741の直上に、幅約1.4m、深さ約10cmの素掘りの東西溝SD7132が位置する。調査区東半のSD7132付近の包含層から、幅約50cmの凝灰岩の切石が出土しており、凝灰岩の据付溝とみられる遺構が一部確認できることから、SD7132上の石敷列SX14341と同様、凝灰岩が敷かれていた可能性も考える。

掘立柱建物SB7140 第72次調査で桁行6間分を検出していた東西棟掘立柱建物の延長を、調査区の東南部で検出した。柱間寸法は桁行約2.7m(9尺)等間、梁行約2.4m(8尺)等間。今回の調査で北西隅の柱穴を検出し、建物規模が桁行7間、梁行2間と確定した。

掘立柱建物SB19735 調査区の西南部で検出した東西3間以上、南北2間以上の掘立柱建物。柱間寸法は均一ではなく、柱穴は径約30cmの小さい円形で、浅く、仮設建物と考えられる。中軸を挟んだほぼ対称の位置で、同様の仮設とみられる掘立柱建物SB7134を検出している。

掘立柱建物SB19730 調査区の東北部で検出した東西4間の掘立柱建物。柱間寸法は約3.0m(10尺)等間。調査区の北方に展開すると推定されるが、塀の可能性もある。

(海野 聡)

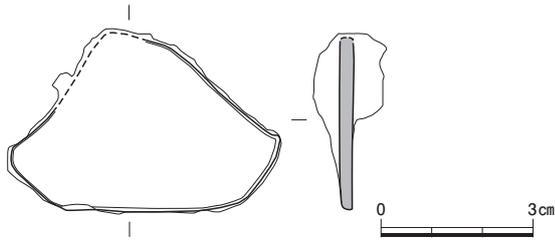


図207 第520次調査出土火打金 2:3

4 出土遺物

遺物包含層から鉄製の火打金1点、鉄角釘2点、耕作溝から鉄角釘1点が出土した。鉄角釘はいずれも頭部が欠損する。図207は火打金と考えられ、薄い鉄板を台形状に整形する。左側辺がやや内彎ぎみだが、錆膨れにより判然としない。幅4.7cm、高さ3.0cm、厚さ0.3cm。平城宮および京での火打金の類例は、内裏東方の基幹排水路SD2700（『昭和61年度 平城概報』）や西一坊坊間路西側溝SD920¹⁾にある。

（芝康次郎）

土器・土製品は、整理用コンテナ2箱分の土器が出土した。奈良時代の須恵器・土師器と中世の土師器・瓦器が大半である。各遺構からは須恵器・土師器の細片が少量出土したのみで図示し得るものはない。耕作溝からは瓦器や土師器小皿が出土しており、中世には耕地化していたことがうかがえる。

（青木 敬・小田裕樹）

瓦磚類・凝灰岩が少量出土したが、特筆すべきものはみられない（表28）。

（今井晃樹）

5 幢旗の遺構について

SX19697～19703・19707～19713については、第72次調査から『平城報告 XⅦ』までの解釈と異なる知見を得たため、これまでの解釈の概略を述べ、今回、新たに幡旗の遺構と判断するに至った論拠を提示したい。

既往の遺構解釈

第72次調査において、東西に長い楕円形の遺構が東西に3基、南北2列並ぶことが確認された。当時は他に類似した発掘事例がなく、2列の柱穴が組み合った棧敷風の遺構SB7141と解釈し、時期もⅡ期・Ⅲ期のいずれとも決め難いとしつつ（『平城報告 XⅠ』）、Ⅲ期の南北溝SD7231および東西溝SD7132に囲まれることから、これらを一連の遺構と解釈し、Ⅲ期としてきた。

今回の調査により、SD7132が石敷列SX14341より西に延びず、SD7131・7132が柱穴列SX19697～19703・19707～19713を取り囲まないことが確認され、これらの遺構を一連と捉えることに対し、再考の必要が生じた。加えて、東西溝SD7132（Ⅲ期）と柱穴SX19697～19703の間隔が約0.4mと非常に近く、同時併存の蓋然性が低いことから、時期を異にすると考えられ、SX19697～19703・

表28 第520次調査出土瓦磚類一覧

軒丸瓦		軒平瓦		その他	
型式	種 点数	型式	種 点数	種類	点数
型式不明(奈良)	1	6663	C 1	凝灰岩	1
				道具瓦	1
軒丸瓦計	1	軒平瓦計	1	その他計	2
	丸瓦		平瓦		凝灰岩
重量	6.335kg		20.108kg		27.624kg
点数	94		421		37

19707～19713はⅡ期の遺構と解釈するのが妥当である。

文献資料・絵画資料にみる幢旗

『延喜式』によると、元日朝賀には、大極殿からみて、中央に鳥形の幢、左（東）側に日像の幢、さらに朱雀・青龍の旗、右（西）側に月像の幢、さらに白虎・玄武の旗、合計7本の幢旗を立てるとされる。また幢旗の柱の相互間隔は「二丈許」（約6m）と定められる。これらの『延喜式』に記された幢旗の数、相互の間隔は、SX19697～19703・19707～19713と一致する。このほか、『続日本紀』にも大宝元年（701）の元日朝賀の際に藤原宮で同様の7本の幢と幡（旗）を立てたという記述が確認でき、8世紀には元日朝賀において幢や幡（旗）を立てる儀式が成立していたと考えられる。

また、院政期の儀式の様子を反映していると考えられる「文安御即位調度図」（図208）には、中央の柱と2本の脇柱を持つ構造の幢旗が描かれ、高さは「三丈」（約9m）と伝える。この3本の柱をもつという特徴も、SX19701・19712で確認された、3つの抜取穴と対応する。

2時期の幢旗遺構

以上のことから、SX19697～19703・19707～19713は、文献や絵画資料の幢旗に関する記述や描写と一致する点が多く、2時期分の幢旗の遺構の可能性が極めて高い。また元日朝賀は大極殿院で執りおこなうのが通例であるが、『続日本紀』によると、西宮において、天平神護元年（765）には称徳天皇が朝賀を受けており、神護景雲3年（769）には法王道鏡が大臣以下の拜賀を受けたことが確認できる。むろん、これらの2回の儀式がSX19697～19703・19707～19713に直接、対応すると即断はできないが、西宮においても、元日朝賀がおこなわれたことを示している。

ただし、①西宮の既発掘調査区でSX19697～19703・19707～19713以外にⅡ期の幢旗の遺構が確認できないこと、②複数回の掘方や抜取穴が確認できないこと、③西宮における元日朝賀が特殊であり、それゆえ『続日本紀』に記載された可能性が考えられること、以上の3点を鑑みると、SX19697～19703・19707～19713は、『続日本紀』に記された2回の正月儀礼に対応する可能性が高いと考えられる。

他の幢旗の遺構との比較

古代宮都における幢旗の遺構は、平城宮第二次大極

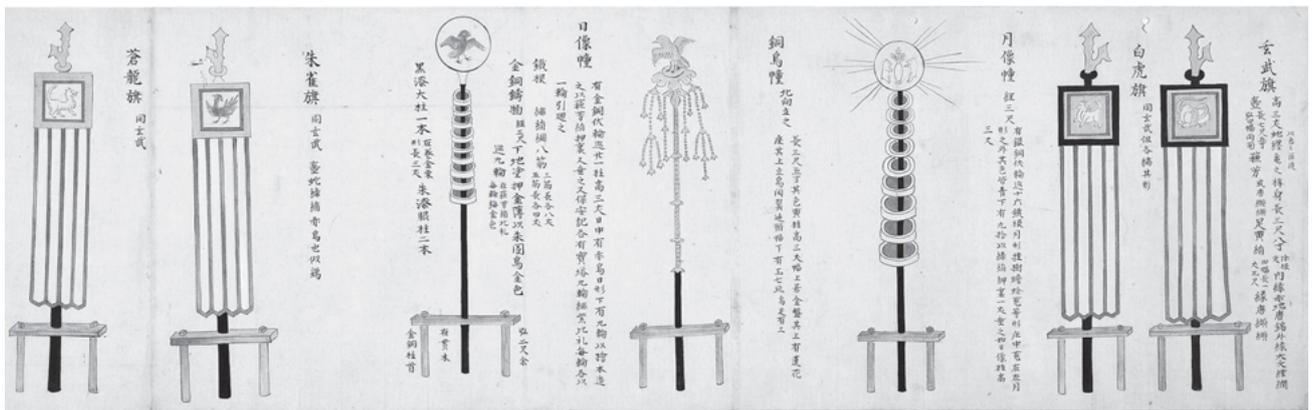


図208 宝幢・四神旗(幢旗)の姿(神宮文庫蔵「文安御即位調度之図」による)

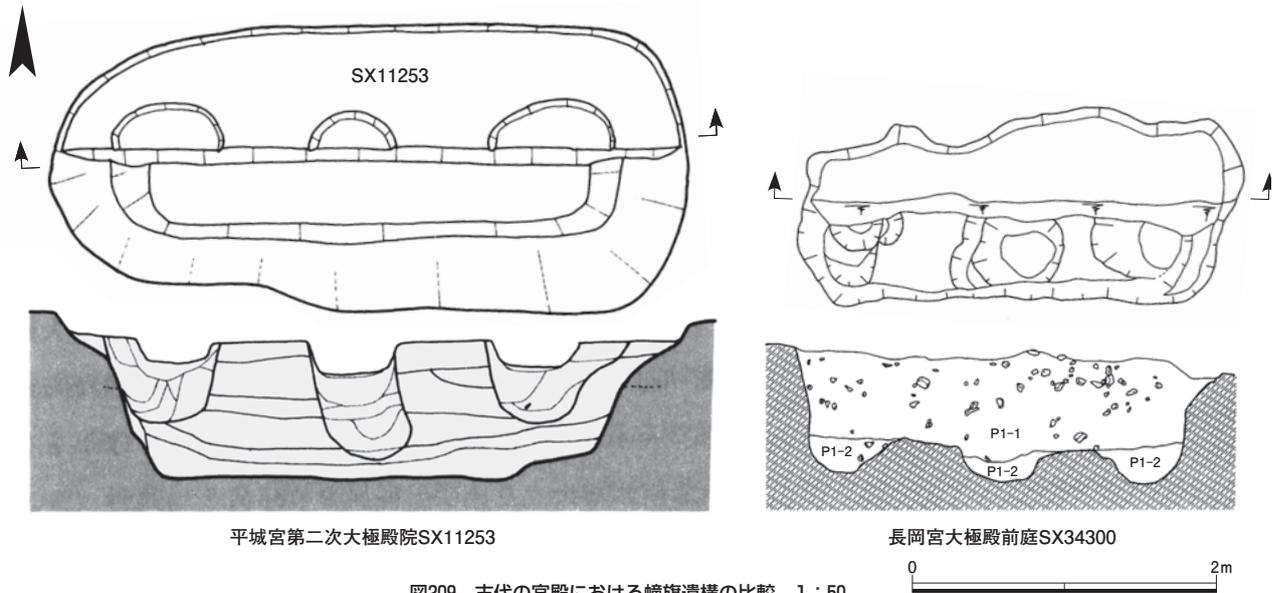


図209 古代の宮殿における幢旗遺構の比較 1:50

殿院や長岡宮大極殿前庭で検出されている。それぞれの特徴を述べつつ、幢旗柱穴SX19697・19703・19707～19713との比較を試みたい。

平城宮第二次大極殿院(図209左) SX9151・9168・11259・11260、SX11252～11258が幢旗の遺構とされ、前者は第二次大極殿の四隅に位置し、光仁天皇の即位式にともなうもの、後者は大極殿の前に東西に並び、桓武天皇の即位式にともなうものとする。SX19697～19703・19707～19713は後者と特徴を一にするため、これを比較対象とする。SX11252～11258は、大極殿の基壇南端から23.6m(80尺)に位置する。柱掘方の規模は東西約4.0m、南北約2.0mで、相互の柱穴の間隔は一定ではなく、7.1m(24尺)～7.7m(26尺)。1つの掘方に3つの抜取穴が確認できる。断面観察によると柱穴ごとに掘方の深さが異なり、中央柱のみやや深い。中央の柱と脇柱の間隔は約1.25mである。また、ともに掘方の底面まで抜取穴が延びず、掘方底面に直接柱を立てた形跡はみられない。

長岡宮大極殿前庭²⁾(図209右) 大極殿の基壇南端から29.5mに位置する。柱掘方の規模は東西約3.0m、南北約1.1mで、相互の柱穴の間隔は約6.0m(20尺)等間。確認された掘方の深さは約60cmで、掘方の底面は平坦ではな

く、柱位置のみ窪んでいる。掘方の大半に礫が詰まっており、抜取穴は掘方の底面でのみ確認したと報告されており、掘方に詰まる礫は礫敷のものと判断しており、掘方に詰まる礫は礫敷のものと判断している。中央柱と脇柱の間隔は約1.0～1.2m。また幢旗が複数回立てられた痕跡はうかがえないとする。

比較 平城宮第二次大極殿院の遺構は、即位に関わる一時的・仮設的なもの、長岡宮の遺構は、元日朝賀にともなうと解釈されている。いずれの幢旗の遺構においても、複数回の幢旗柱穴の掘削は確認できない。

今回の調査で検出した2時期の幢旗遺構SX19697～19703・19707～19713は、西宮という場所の特殊性を考慮する必要はあるが、元日朝賀などの儀式にともなうものと考えられる。位置を違えて2ヵ所に設置しており、また抜取穴より復元される柱径が約25～30cmと細いことから、幢旗を支える常設の構築物の設置は考え難い。

一方、長岡宮の遺構では、個別の柱の抜取穴がみえず、掘方の底部にのみわずかに残る。この点から、中央柱・両脇柱を個別に抜き取ったのではなく、3本セットで柱を抜き取った可能性、あるいは幢旗を固定するための常設の構築物を抜き取った可能性が考えられる。

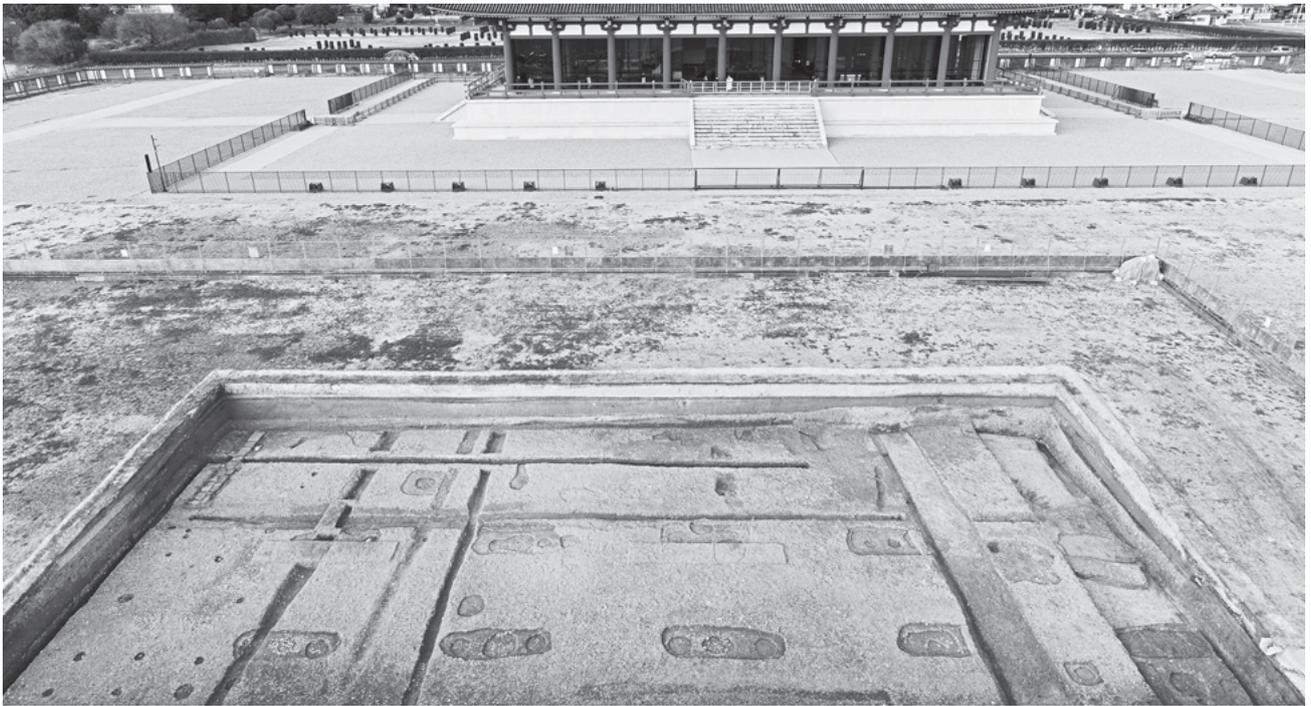


図210 第520次調査区全景（南から）

幢旗の施工に関する一考察

幢旗柱穴SX19697～19703・19707～19713の遺構の特徴をもとに、幢旗の施工について一考を案じたい。まず、柱穴を布掘りとする点は、中央の柱と脇柱の間隔を一定とし、東西方向の誤差に対応させる目的が考えられる。すなわち、3本の柱の間隔は、柱を相互に繋ぐ横架材によって定まっており、これを調整した上で、掘方が埋められたと推察できる。また抜取穴から想定される中央柱の間隔は約5.9m（20尺）等間で、その施工精度は高い。

次に柱穴の底面の標高を揃える点は、地表からの掘削深度を一定とすることで、柱の下部の高さ調整を省力化し、幢旗の頂部の高さを揃えるための工夫と考えられる。3本の柱が横架材などにより固定された状況の場合、柱の底部の高さ調整は特に困難であり、柱穴の底面の標高を揃えることは有効な方法であろう。

また南側の柱穴SX19710・19712をみると、掘方の壁に接して柱を立てるが、これは南北・東西方向の柱位置調整の省力化と柱位置の限定による掘削範囲の縮小のための工夫と考えられる。さらに南北の柱穴列で、中央柱と脇柱の間隔、柱穴の掘削深度がほぼ等しい状況から、同じ幢旗を使用した可能性や幢旗の形状が定型化していた可能性も想定できる。なお、第二次大極殿院と西宮の遺構で中央柱と脇柱の間隔が異なるが、第二次大極殿の遺構の抜取穴は大きいため、西宮と同じ幢旗を使用したとしても、遺構解釈に齟齬は生じない。また抜取後の再舗装の範囲は掘方とほぼ位置を違えていない。ここから掘方の掘削から抜取・再舗装までの時間的近接、すなわち幢旗の仮設性・一時性がうかがえる。加えて礫敷の再

舗装は広場の礫敷舗装に対する維持・復旧に対する配慮の表れであろう。

6 まとめ

今回の調査によって得られた主な知見は、Ⅰ期（第一次大極殿院）の南北通路とその西側溝、Ⅱ期（西宮）の大規模な造成、Ⅱ期（西宮）の幢旗の遺構の3点である。

Ⅰ期における南北通路の発見は、大極殿の区画における中軸線や大極殿と大極殿院南門までの動線を考える上で、重要な知見である。加えて、宮城における中軸線の重要性を示すものと考えられる。また古代宮殿の元日朝賀に関わる幢旗の遺構は、長岡宮大極殿前庭において確認されてきたが、今回の調査において西宮の区画で検出したことにより、大極殿院以外の場所で元日朝賀がおこなわれたことが考古学的に示された。さらに検出した遺構が『延喜式』に記載される柱間寸法と一致し、「文安御即位調度図」に描かれた中央柱と2本の脇柱を有する構造と特徴を同じくしていた。なお、今回あきらかとなった幢旗の様相は、あくまで奈良時代後半のものであり、奈良時代前半以前の様相については、藤原宮中樞部の発掘成果に期待したい。

（海野）

註

- 1) 奈文研『平城京右京八条一坊十一坪 発掘調査報告書』1984。
- 2) 財団法人向日市埋蔵文化財センター『長岡宮「北苑」・宝幢遺構』2005。

図版出典

図209左図：『平城報告 X IV』、50頁、Fig.24。
右図：注2）前掲書、100頁、第56図。